
ギュスターヴ・カイユボットの「洗濯物連作」に関する一考察

ギュスターヴ・カイユボット(1848-1894)の後期の代表作《セーヌ河畔の洗濯物》を核とする、洗濯物を描いた一連の作品を再検討する。カイユボットは、1888-92年頃に、習作二点、完成作三点からなる本連作を制作した。《セーヌ河畔の洗濯物》は、晩年最大の意欲作であるにもかかわらず、画家の後期作品が殆ど研究されていないこともあって、これまで本格的に論じられたことはない。加えて、この作品群が連作であることを意識的に論じた研究は皆無であり、その制作意義も明らかとなっていない。そのような研究状況を踏まえ、本発表では、三点の完成作を連作として捉えることで、新たな視点を提唱する。

はじめに、これまでの研究において議論されてこなかった、各作品に描かれているのは「何処」か、描かれた洗濯物は「何」なのか、あるいは「誰」のものなのかという具体的な問題を、同時代資料から検証する。

次に、連作の主題を作品ごとに解釈する。連作開始作《セーヌに浮かぶ共同洗濯船》では、洗濯物という主題がカイユボットの画業初期から続く社会的主題と結びつくことを確認する。本連作の主題は全体として二つの主題——第一に「洗濯物」、第二には「風」——に跨がっているのであるが、連作が進むにつれ、前者から後者へと焦点が絞られていくという傾向が見られる。そうした観点からすると、次に制作された連作中心作《セーヌ河畔の洗濯物》は、まさにその二つの異なる主題が拮抗した作品であるのだが、そのことは、デュランティが『新しき絵画』において、印象派の主題は「人間主体の現代風俗」と「自然の移ろいの描写」に分かれると定義したことと同調する。発表者は、後期のカイユボットが、自らが半生をかけて関与し続けた印象派への一つの答え——忠誠心ないし可能性——をそこに投影したのではないかと考える。

さらに、連作最終作《洗濯物》で圧倒的となる「風」という主題は、「無人の洗濯物」と結びついた時、印象派絵画の孕むさまざまな本質の中でも、客観性よりも主観性、すなわち気質や観念といったものを反映し、その結果、象徴性と抽象性をも帯びるのではないかと考えられる。その問題の検討にあたっては、そもそも「洗濯物」というモチーフが西洋絵画の中でどのように表現され、どのような意味を担ってきたかというモチーフ学的観点も視野に入れる必要がある。無人の洗濯物モチーフは18世紀後半の屋外制作派の油彩習作に起源を持つこと、印象派は人間に付随する伝統的図像としてしかこのモチーフを描いていないこと、また、19世紀後半から20世紀初頭の象徴主義の系譜にある画家たちが無人かつ風に吹かれた洗濯物モチーフを主題として集中的に描いていること等を指摘し、そのことを通して、カイユボットの後期作品における先進性をも示唆したい。